

【論 文】

「記憶地図」を通じた奥尻島の 2 つの例祭巡行の比較

蟬塚 咲衣・浅妻 佑軌・高橋 佑惟・佐々木 理子
稲垣 森太・手塚 薫

要 旨：筆者らは北海道・奥尻島において、災害からの復興や島の年中行事、民俗などをテーマに調査しアーカイブする活動を継続中である。通常は記録に残らないが故に、喪失の危機と隣り合わせにある「暗黙知」に着目し、それらを「形式知」に転換させることで、それまで意識せずに行ってきた行為を再認識し、創造的な知を創出し、それを普通の営為に還流させることに貢献できると考える。

そこで、現在も巡行が行われている青苗地区と奥尻地区の現代の神社例祭を対象に、個人が有する記憶や経験を統合・可視化する「記憶地図」の作成を行い、2 地区の比較を行った。

その結果、青苗地区では 1993 年に発生した北海道南西沖地震の影響による例祭の著しい変化が判明した。一方、奥尻地区では同震災による大きな変化はなかったが、「不幸」や天候といった震災や少子高齢化以外の種々の影響によって、毎年のようにルートや日程に複雑な変化が生じていることが明らかになった。

さらに、2 地区の比較によって、神社と巡行の関係性、立ち寄り先、参加者の傾向などの相違が明確になった。今回の「記憶地図」作成の取り組みによって判明した例祭の対照的な相違の結果を相互に参照することで、今後の自然・社会環境への柔軟な対応に資することが期待される。また、調査の過程で、過去の記憶が生き活きと蘇る「昔時覚醒作用」ともいべき思いがけない効果が確認できた。

キーワード：奥尻島、巡行、例祭、GIS、アーカイブ

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

筆者らは 2015 年から、奥尻島の年中行事や民俗、とりわけ例祭を中心テーマに据え、自然災害とそこからの復興過程のほか、個人や組織による多様な実践や語り継がれる知識・経験を聞き取る活動を行ってきた。例祭を取りあげるのは、毎年繰り返される地域社会最大の娯楽であり、多くの人々を結束させ、そこで暮らすことの意義を再確認させるほば唯一の機会となっているからである。奥尻島内の各地区で行われている神社例祭において、かつて 12 地区¹で行われていた神輿や山車（島民らは「ヤマ」と呼ぶ）を用いた巡行は、人口減少や少子高齢化の問題によって例祭の継承・維持が困難となり、現在は 2 地区のみとなっている²。同じ島内の例祭であるが排他的に実施され、参加者、性格、存続戦略も対照的であり、それらをアーカイブしようとする試みはなかった。今記録しておかなければ、貴重な文化遺産が失われ、将来に禍根を残す。

調査の過程では、個々に人から聞き取った情報を、GIS（地理情報システム）を用いて位置情報と結びつけて地図上に統合し視覚的に表現する「記憶地図」を作成している（佐々木ら 2019: 48-50）。近年、通常は記録に残らない人々の振る舞いや集合的な無意識などは「暗黙知」と呼ばれ、公文書の保管という次元とは異なるが、デジタルアーカイブの対象となっている（吉見 2017: 14）。地方の、とりわけ観光資源化されていない祭礼なども日常

的な人々の営為に含めることができるが、記録保存されていないために常に喪失の危機と隣り合わせである。一方、客観的・理性的・順序的な知識は「形式知」に分類される（野中ら 2020: 101）。アーカイブの役割とは、「暗黙知」と「形式知」を繋ぐことにあるとされる（高山 2008: 44-46）。矛盾や断裂をも含む証言や記憶などを集積し、言語・記録化することによって「形式知」に転換し、それまで意識せず行ってきた活動を再認識し、「暗黙知」の領域に還流させ、あらたな知の創造に貢献することができる。「記憶地図」の作成と公開を通じ、地方町村の「災害継承」や「地域振興」に資するとの見通しを描いている。

近年、災害や地域文化のデジタルアーカイブが進められており、これまでアーカイブにおける定番の機能とされてきた記録や保存に加え、収集した情報の利活用にも留意した「災害伝承」（今村 2019: 6-11; 柴山 2019: 22-23; 三浦ら 2019: 120-121）や「地域振興」（笠羽 2010: 24; 河角ら 2017: 24-25; 矢野ら 2017: 120-121）が注目されている。

1-2. 研究の目的

祭礼や民俗芸能といった質的な情報に関するアーカイブを容易にする手法の1つが「記憶地図」である。「記憶地図」とは、個人が有する記憶や経験を共有・描出することを通じ、物的記録媒体に統合する過程およびその結果であり、先行研究においても被災地の祭礼の復興支援を目的とした GIS を用いた研究が行われている（板谷ら 2015: 75-78; 板谷ら 2017: 226-228; 谷端ら 2018: 193-200）。しかし、これらは東日本大震災によって多大な影響を受けた被災地における「記憶地図」の作成の試みである。

青苗地区の例祭は、1993年に発生した北海道南西沖地震（以後、震災とする）の被害により巡行が休止に追い込まれたが、6年後に再開されたことから「災害復興」に関わる事例の1つである。また奥尻地区は、震災以前に少子高齢化を理由に途絶していた巡行が1999年に再開したことから、青苗地区とは異なる様相を示していると考えられる。本研究では、同一の自然・社会環境のなかにながら、異なる理由で中断し再開された2つの例祭を同時に比較することで、その対応の多様性に着目できるという利点がある。

本研究では、現在も巡行を行っている、青苗地区と奥尻地区の2地区を対象に、「記憶地図」を用いたアーカイブ活動を通じて現代の例祭の詳細な比較を行う。例祭を地理空間に位置付けて全体像を把握しやすくすることを主眼とする。具体的には、例祭組織、巡行構成、山車行列、参加者の傾向、立ち寄り先、山車役員数・役職、巡行ルートについて比較する³。これらの情報は写真や証言とともに「記憶地図」に集約し、ICTなどで配信・共有することが可能である。本稿では、視覚的に理解しやすいようにこれらを個別に扱う。

2. 調査対象地と調査方法

2-1. 調査対象地

奥尻島は、北海道の南西沖に位置しており、2019年時点の人口は2,470人、世帯数は1,406世帯であり⁴、南端の青苗地区と東側の奥尻地区が特に多くの人口を有している（図1）。島全体の人口は、最も多かった1962年の8,217人から約7割減少しており（奥尻町役場 2003: 209-210）、近年も減少傾向にある。奥尻町は20代から30代の女性の減少率が全国で4位、北海道で1位であることから「消滅可能性自治体」とされている⁵。近年の産業構造については、第3次産業従事者が最も多く1,000人以上を維持しているが、一方でかつて

の主力産業である第1次産業は4分の1、第2次産業は3分の1に減少している⁷。

青苗地区と奥尻地区について、震災による被害状況と例祭の特徴を比較したものが、表1である。

まず、青苗地区は奥尻島の南端に位置し、現在の人口は855人、世帯数は486世帯であり、人口・世帯数ともに島内で最多の地区である⁸。また、隣接している米岡地区に奥尻空港があることから、空の玄関口としての役割を有している。震災時、島内の地区で最多となる87人が犠牲となり、甚大な被害を受けた（奥尻町役場1996:210）。青苗言代主神社例祭に関わる神社社殿や祭器具などほとんど全てを消失し、巡行は6年間の中断を余儀なくされた。

続いて、奥尻地区は島の東側に位置し、現在の人口は510人、世帯数は290世帯であり、青苗地区に次いで島内で2番目に人口・世帯数が多い地区である⁹。港には、島と対岸の江差町を結ぶフェリーターミナルがあり、海の玄関口としての役割を有している。震災時には31人の犠牲者が出たが、その大部分が観音山のがけ崩れによるホテル洋々荘への被害であり（奥尻町役場1996:212）、震災による神社や祭器具への被害は鳥居と灯籠の一部倒壊という比較的軽微なものにとどまったことから¹⁰、澳津神社例祭への影響は少なかった。また、奥尻地区は震災以前から少子高齢化によって神輿と山車の巡行を中断していた。

各地区の例祭に関しては、例祭日は両地区ともに3日間ある開催期間のうち1日は互いに重複している。祭神は、青苗言代主神社例祭では事代主神、大海龍命、天照大神が祀られており¹¹、奥尻地区では奥津島姫神、大海龍神が祀られている¹²。参加する氏子について、青苗言代主神社例祭は元々字青苗という1つの字の住民のみで行われていた。しかし、震災後の復興計画によって一部の氏子は隣接する字に移住したが、現在も例祭の担い手のままである（蟬塚ら2019:166）。他方、澳津神社は字奥尻と字球浦の2つの字を所掌している。

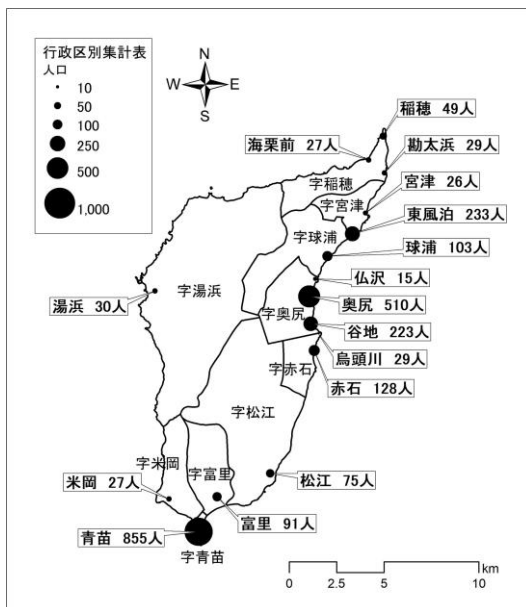


図1 奥尻島各地区の人口⁵

表1 青苗地区と奥尻地区の被害状況と例祭の比較

		青苗地区	奥尻地区
震災の被害	死者数	87人	31人
	行方不明者	20人	1人
	全半壊戸数	342戸	38戸
被害	神社	社殿焼失	鳥居と灯籠の一部倒壊
	祭器具	ほとんど全て消失	被害無し
例祭	例祭名	青苗言代主神社例祭	澳津神社例祭
	例祭日	毎年8月12～14日	毎年8月14～16日
	祭神	事代主神、大海龍命、天照大神	奥津島姫神、大海龍神
	参加字	字青苗、字米岡・富里の一部	字奥尻、字球浦

各地区の例祭に関しては、例祭日は両地区ともに3日間ある開催期間のうち1日は互いに重複している。祭神は、青苗言代主神社例祭では事代主神、大海龍命、天照大神が祀られており¹¹、奥尻地区では奥津島姫神、大海龍神が祀られている¹²。参加する氏子について、青苗言代主神社例祭は元々字青苗という1つの字の住民のみで行われていた。しかし、震災後の復興計画によって一部の氏子は隣接する字に移住したが、現在も例祭の担い手のままである（蟬塚ら2019:166）。他方、澳津神社は字奥尻と字球浦の2つの字を所掌している。

2-2. 調査方法

青苗地区の青苗言代主神社例祭の調査に関しては、開催期間である2018年8月12～14日と2019年8月12～14日に、青苗言代主神社内で行われた神事（宵宮・本宮）への参加、神輿担ぎや山車曳きの調査、戸別訪問を行った。例祭に関わる3組織（氏子総代、恵比須山協賛会、青苗みこし保存会）のメンバー、神事や巡行に参加している地元住民、帰省した元島民、見物客などに聞き取り調査を行った。被調査者の人数は、同一人物を除き計58人である。

奥尻地区の澳津神社例祭の調査に関しては、例祭の開催期間である2018年8月15～16日と、2019年8月14～15日に、澳津神社内で行われた神事（宵宮・本宮）への参加、山車曳きへの参加、四箇散米舞（しかさごまい）行列の視察を行った。例祭に関わる2組織（氏子総代、神威山巡行実行委員会）のメンバー、神事や山車曳きに参加した地元住民、帰省した元島民、見物客などに聞き取り調査を行った。被調査者の人数は、同一人物を除き計43人である。

両地区に共通して、半系統的インタビューによる質的な情報の入手はもちろんのこと、GISやGPSを用いて量的なデータ収集に努め、それらをGISによる「記憶地図」の作成に用いた。「記憶地図」の作成には、Esri社のArcMap(10.8)を使用した。GISとは、地上の事物や現象に関する位置情報を地図上に可視化し分析することができる手法であり、人々の持つ記憶を位置情報と結び付け、地図上に視覚的に表現しアーカイブすることを可能にする。図6の地図は、奥尻町青苗支所から提供を受けた1987年の住宅地図を画像データ化した後、GIS上でジオリファレンスを行い画像に位置情報を付与し、さらにレクティブアイを行うことで具体的な解析が可能なデータを生成した。その後、GISのエディター機能を使用して建築物や道路のトレースを行った。図7の地図は、ゼンリン住宅地図の『北海道奥尻町(2016:27-28)』を図6同様にGISデータ化し、建築物などをトレースした。図8～12の地図は、国土地理院の電子国土基本図(地図情報)を用いた。

「記憶地図」とは、聞き取り調査で明らかになった複数人による証言や、巡行ルート、写真といった様々な情報を統合し可視化する手法であり、GISを使わなければ作成できないわけではない。しかし、GISを使うことで、作成・表示・分析という3要素に関して利点がある。旧版地図と現在の地図を重ね合わせて縮尺を変更する場合、本来はトレース作業から縮尺変更までをアナログで行う必要があるが、GISは幾何補正(ジオリファレンス)を行うことでより正確な重ね合わせが可能であり、任意の縮尺に容易に変更できる。さらに、情報をデジタルで蓄積しアーカイブ化することによって、検索やICTでの公開が可能なデータベースを構築でき、過去の研究事例と比較することができる。また、巡行ルートの計測など祭礼の空間的側面に着目した分析も可能である。

3. 両地区の巡行の比較と「記憶地図」

3-1. 両地区の巡行の比較

両地区の例祭組織、巡行構成、山車行列、参加者の傾向、立ち寄り先、山車役員数・役職について比較する。

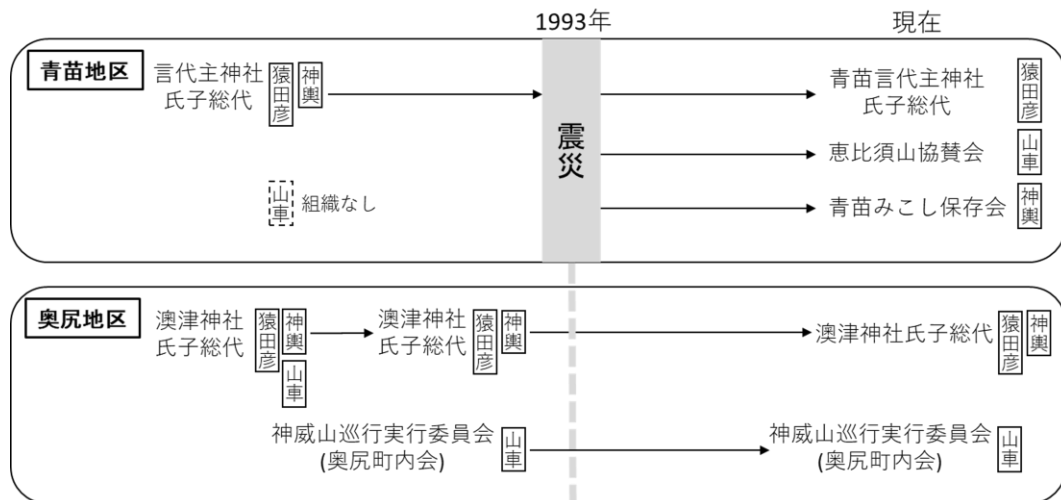


図2 両例祭組織の比較¹³

まず例祭組織を比較したのが、図2である。青苗言代主神社例祭については、震災以前は神社組織である氏子総代が猿田彦と神輿を管理しており、山車の組織は存在していなかったが、震災以降は、山車、神輿の組織がそれぞれ新設され、現在は3つの組織が併存している（蟬塚ら2020: 127）。また、その年に巡行を行うか否かの決定権は氏子総代にあり、巡行に際しては神輿と山車双方に魂入れを行い、宮司も随伴することから、巡行組織（恵比須山協賛会）と神社との結びつきが強い。奥尻地区の奥津神社例祭については、平成以降に奥津神社の神社組織である氏子総代と山車の組織が分離し、山車専用の組織である神威山巡行実行委員会が結成され、その状態が現在も続いている。山車巡行の決定に氏子総代は一切関与していない。一方で氏子総代の高齢化が進んでおり、神輿は20年ほど担がれていないのが実情である。宮司は山車に魂入れを行っておらず、巡行にも随行しない。このように、山車巡行においては神社との関係が弱いことを指摘できる。

次に巡行構成を比較すると（図3）、青苗言代主神社例祭の巡行は、震災以前は5つの要素で構成されていたが、現在は猿田彦、神輿、山車の3要素にまで減少している。奥津神社例祭の巡行は、最も多いときで天狗、四箇散米舞行列、猿田彦、神輿、山車の5つの構成要素が存在した。四箇散米舞行列については3-3で詳述するが、社殿内で対面する形で舞われる、松前神楽の四箇散米舞から派生したものであ

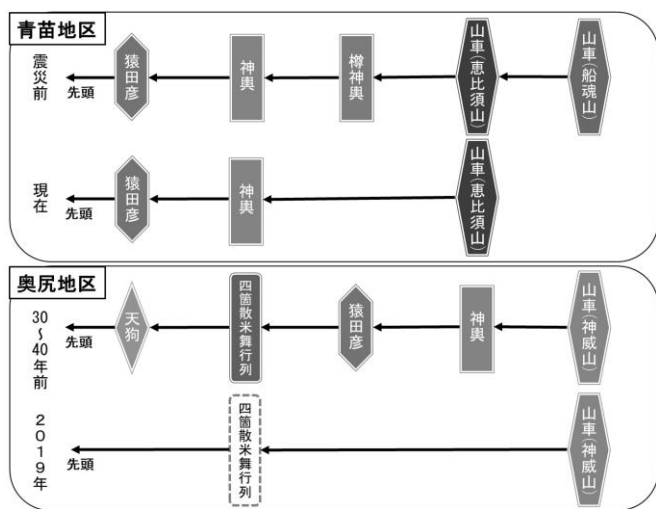


図3 両例祭巡行構成の比較

年8月15日13時の出発時刻ごろの澳津神社例祭の山車行列を表しており、先導車やバッテリー車、給水車の乗員を除いて総勢67人が参加していた。佳境に差し掛かった夕方18時ごろには、見物人も含めさらに人数が増えていく。奥尻地区では平地での巡行が主なため、青苗地区と異なり曳綱の構造は1本である。スピーカーを用いて流される音楽は、北海盆歌のような民謡から、近年流行したポップスなど様々なものがあり、笛吹は横笛とリコーダーを用いて途中で交代しながら進む。

参加者の傾向を比較すると、まず青苗言代主神社例祭の巡行は、できるだけ青苗地区の住民で行おうとする傾向がある。一方、澳津神社例祭の巡行は、出身地を問わず誰でも参加できるイベント的な側面を有する。また、山車曳きには島内にある航空自衛隊の隊員15人と北海学園大学の学生6人が参加しており、主要なマンパワーとなっている（図5）。

表2 神威山の主要な立ち寄り先一覧

時間	停止位置	時間	停止位置	時間	停止位置
1 12:57	釣懸橋手前付近	9 14:44	エネオス奥尻SS	17 18:32	叶寿司前
2 13:09	奥尻町営自動車整備工場前	10 15:09	海洋センター前	18 18:52	乾清寺、民宿小林前
3 13:26	奥尻町国保病院前	11 15:31	川尻旅館、浜旅館前	19 19:03	まつや食堂、ボンユウ前
4 13:37	柴野商店前	12 15:50	ヒラキスポーツ前	20 19:34	さいとうストア前
5 13:57	奥尻町役場前	13 16:13	谷地の自衛隊官舎1号棟2号棟前	21 19:48	やました酒店、成田薬店前
6 14:14	フェリーターミナル前	14 16:45	実行委員長宅前	22 20:33	セイコーマート奥尻店前
7 14:28	奥尻食堂前	15 17:19	鍋釣岩前駐車場		
8 14:35	青年部直売所、さとう食材前	16 18:10	居酒屋寿、スナックメモリー前		

立ち寄り先に関して比較すると、青苗言代主神社例祭において山車は家々を一軒一軒巡り、ニシン漁の網を引き揚げる掛け声を起源に持つ「ハオイ」が掛けられるのが特徴である（宇苗2013: 44）。江差町では「キリゴエ」と呼ばれているが奥尻島では「ハオイ」と呼ばれ、大漁祈願（漁師）、商売繁盛（商人）など訪れる家の職業によって掛け声が変わる（宇苗2009: 25-28; 蟬塚2020: 35）。一方、澳津神社例祭においては、山車は病院前や商店街、フェリーターミナル、自衛隊官舎など主要な立ち寄り先22カ所で止まり（表2）、参加者が輪になり踊ることが特徴である。1999年の再開以前は、家々を一軒一軒巡っていたとされる。

両地区の山車役員数・役職に関しては、山車の運営組織である「恵比須山協賛会（青苗言代主神社例祭）」と「神威山巡行実行委員会（澳津神社例祭）」を比較したのが表3である。

双方とも30人程度で構成されており人数に差はほとんどない¹⁵。山車の規模もほぼ同じであるにも関わらず、両者の曳き手の数には大きな差異がある。その差を生み出しているのは、参加者の傾向とも密接に関わるが、外部協力者（自衛隊員や島外からの大学生）の存在の有無である。

表3 両例祭山車役員数・役職の比較

恵比須山協賛会		神威山巡行実行委員会	
役職名	人数	役職名	人数
会長	1	実行委員長	1
副会長	2	副実行委員長	1
監査	2	山車頭	1
会計	2	お礼廻し	6
いかまわし管理	2	会計係	2
はおい管理	7	山車舵	2
下声管理	5	山車付	1
運行管理	5	後方ブレーキ	1
設備管理	1	電源・照明係	1
安全・救護管理	3	音響係	2
太鼓・笛管理	3	車両係	2
合計(重複除く)	33	誘導係(交通整理)	1
		太鼓・笛	1
		踊り振りつけ	4
		ハンテン係	1
		事務局	3
		食事係り	8
		合計(重複除く)	26

3-3. 奥津神社例祭の「記憶地図」

2018年と2019年の調査を踏まえて作成した奥津神社例祭の「記憶地図」3枚のうちの1枚が、図8である。奥津神社例祭は、震災による大きな影響を受けておらず、地元住民の話では巡行ルートに変化はないとのことであった。筆者らも2018年と2019年の巡行ルートに変化がないものと当初は予測していた。



図8 奥津神社例祭の「記憶地図 (2019年)」(円内は【自然災害伝承碑】)

この地図には、国土地理院が過去の自然災害における教訓の伝承と、それを踏まえた防災行動による被害の軽減を目的に、2019年から公開を開始した新しい地図記号である「自然災害伝承碑」が記されている¹⁶。この地図記号が北海道で最も早く公開されたのが、奥尻島にある北海道南西沖地震を伝える4基の伝承碑であり、そのうち1基は奥尻地区にあり、震災によって大きな被害が出た「洋々荘」の跡地を示している。もう1基は青苗地区にあり、岬の先端に位置する「時空翔」を示している¹⁷。今後「記憶地図」を用いて例祭について触れる際に、この伝承碑に言及すれば、「災害伝承」にも有用であろう。

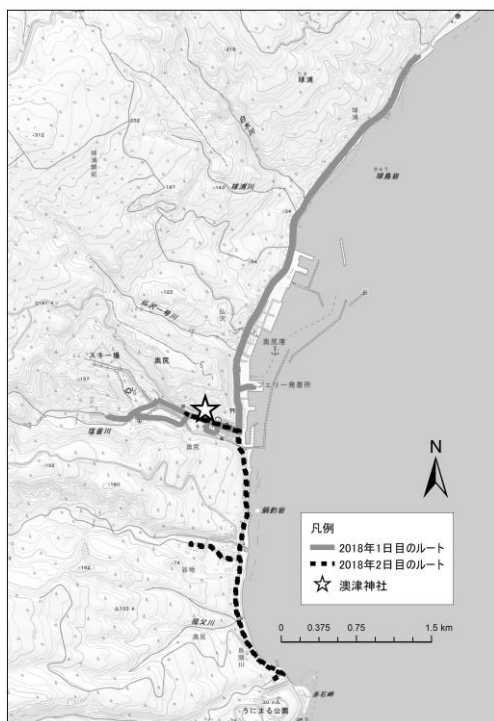


図9 2018年の巡行ルート

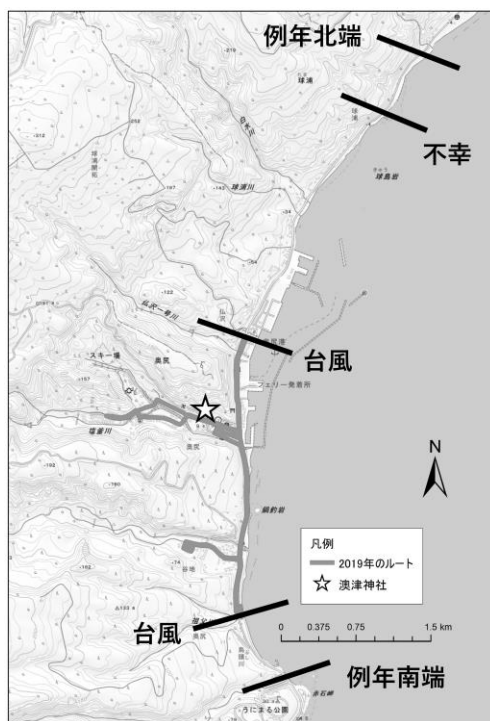


図10 2019年の巡行ルート

図9と図10は、2018年、2019年における奥津神社例祭の山車巡行ルートをGISで表したものである。2018年は1日目が実線のルートで北側を巡り、2日目が破線のルートで南側を巡る。一方2019年は、巡行ルートが例年に比べ大幅に短縮された。まず北側に関しては、地元住民の「不幸」があったため、往復約1.2km短縮された。これは、奥尻島では娯楽性の高い行事とされている祭りでは「不幸」のあった家は訪れないという慣習があるためである（蟬塚ら 2019: 168）。また、台風による悪天候が予想されたため、さらに往復約5.4km短縮された。次に南側に関しては、台風の影響で巡行が1日行程に変更されたため、往復約1.8km短縮された。その結果、南北合わせて例年よりも総距離にして約8.4kmの短縮が行われた。



図 11 2018年の市街地のルート



図 12 2019年の市街地のルート

図 11 と図 12 は、奥尻地区市街地内での詳細な巡行ルートの違いを GIS で表したものである。2018 年と 2019 年では市街地内での巡行ルートが変更されている部分がある。このルート変更の理由については今後の現地調査で詳しく調べていく必要があるが、現時点では地区内で「不幸」があった家を避けるためのルート変更ということが予想される。記憶地図を用いて比較することによって、暗黙知のレベルのままでは明示化も継承も困難なルートの詳細な差異が明らかになった。図 12 には四箇散米舞行列のルートも記されている。すでに述べたように、この四箇散米舞行列は 30 年ぶりに復活したものである。奥尻地区には 1955 年頃に澳津神社 2 代目宮司であった常盤井氏によって伝えられ、行列形式にアレンジされた。球浦青年団が最初に取り組み、その後は小学生によって演じられるようになった¹⁸。以前行われていた時は、小学生 40 人程の行列で山車と同じルートを巡行し、例祭の 1 日目は北側の球浦、2 日目は南側の烏頭川まで練り歩くものであったが、2019 年には、神社参道の階段から海側へ進み郵便局前で折り返す短縮ルートで披露された。

2019 年の澳津神社例祭では 8 月 14 日に宵宮、8 月 15 日に本宮が行われ、両日において「寿都松前神楽保存会」により松前神楽が奉納された。「寿都松前神楽保存会」は 1953 年に設立された組織で、約 30 人で構成されている。主な活動として町内神社の例大祭奉仕や他地域の松前神楽保存会との合同公演などが挙げられる。奥尻地区の澳津神社 4 代目（先代）宮司である牧田氏との縁があり、保存会側が奥尻での奉仕を望んでいたことと、奥尻側からも澳津神社例祭での松前神楽奉奏を希望する声があったことから、2019 年に保存会のメンバー 11 人による奥尻島の来訪が実現した¹⁹。宵宮は 17 時 30 分から約 1 時間半行われ、幣帛舞、福田舞、山神舞、三番叟舞、神遊舞、獅子舞が披露された。翌日の本宮は 10 時から約 1 時間行われ、福田舞、獅子舞が披露された。この後公開された四箇散米舞行列は、前日の宵宮で神楽を見た地元住民らの強い要望によって、「寿都松前神楽保存会」の協力のもと、午後の山車行列巡行の前にサプライズ的に実現したものである。保存会と「神威山巡行実行委員会」のメンバーに加え、小学生の時以来久しぶりに舞を演じた地元住民の女性 6 人も飛び入り参加した。しかし、恒常的な催しになるかどうかは現時点では不明である。

4. 研究の成果と課題

4-1. 研究の成果

青苗言代主神社例祭（以後、「青苗」とする）と澳津神社例祭（以後、「奥尻」とする）の「記憶地図」を作成し、今回紙数の関係で地図上に盛り込むことができなかった、聞き取りに基づく情報も加味して詳細な比較を行ったことで、以下の特徴が明らかになった(表4)。

表4 両例祭のまとめ

	青苗地区	奥尻地区
例祭名	青苗言代主神社例祭	澳津神社例祭
巡行構成(現在)	猿田彦 — 神輿 — 山車	(四箇散米舞行列)— 山車
神社と巡行の結びつき	強い	弱い
巡行の特徴	伝統的	現代的
立ち寄り先	一軒一軒	主要な立ち寄り先22カ所
参加者	できるだけ地区内で	外部協力者も受け入れ

まず現在の巡行構成については、「青苗」は3つの要素を有するが、震災後の要素の減少は人口減少や少子高齢化を見越した合理的な対応がなされていた（蟬塚ら 2019: 165-166; 蟬塚ら 2020: 126）。「奥尻」は近年1つの要素のみで巡行しているが、2019年には四箇散米舞行列が特別に復活した。

神社と巡行の結びつきに関しては、巡行を行うか否かの決定権や宮司随伴の有無から、「青苗」は神社と各巡行組織間の連携が取れており、神社との結びつきが強いことがうかがえたが、「奥尻」の巡行は神社とは無関係に実施されており結びつきは弱い。

巡行の特徴に関しては、「青苗」は笛や太鼓、「ハオイ」など、電子機器を用いない伝統的な特徴を有する。一方「奥尻」はマイクやスピーカーといった電子機器を用いてポップスに合わせて踊るなど現代的な特徴を有しており、図5の山車行列図に見える「バッテリー一車」がそうした機器に電源を供給している。

立ち寄り先については、「青苗」が家々を一軒一軒巡る形式を震災以前から維持しているのに対し、「奥尻」はかつて一軒一軒巡っていたが、現在は表2で示した立ち寄り先を限定する形式へ変更している。

参加者については、「青苗」は主に青苗地区内の人々であるが、「奥尻」は外部協力者の支援を仰いでいる。このように、両例祭には対照的な特性が見られる。

「記憶地図」による可視化によって、「青苗」に関しては、復興時に生じた参道や町並みの変化が、例祭の臨場感の低下や、盛り上がりに影響をおよぼしたことが明確になった。

「奥尻」に関しては、「不幸」や天候といった震災や少子高齢化以外の様々な要因によって、ルートや日程に変化が生じていることが明らかになった。

1-1 で述べたように、組織内のイノベティブな知識創造において、暗黙知と形式知の円環が不可欠である。ここでは「共同化」、「表出化」、「連結化」、「内面化」という4つの

知識変換モードが重要だとして注目されている（金井ら 2012: 12-14）。この4つは、共通の実践経験を通して、暗黙知を獲得し共有する「共同化」、暗黙知を他者に伝えるための形式知に変換する「表出化」、異なる形式知同士を結びつけて新たな知識を生み出す「連結化」、体系的に学んだ形式知を、現場での省察を通して暗黙知に変換する「内面化」からなる。このうち最重要なのは、「表出化」と「連結化」である。どんなにすぐれた暗黙知であっても「いまその場で」創られている知識であり、アナログ的な性質を有しており、そのままでは他者へ伝えることが難しい。それを「記憶地図」のように、図や言語を用いて特定のコンテキストに束縛されない普遍的な「あのときあそこで」という過去の事物に関するデジタル的な知識に変換し、電子的に伝達・蓄積できるようにすることが求められる（野中ら 2020: 11）。青苗と奥尻の例祭は、通常は相互に参照される機会はないが、どちらも、奥尻島という同一の自然・社会環境の変化に対応して、きわめて対照的な在り方を示しながら今日まで存続している。青苗と奥尻の例祭で生まれた2つの対照的な暗黙知を形式知に変換して結びつける「連結化」によって、少子高齢化のような例祭を阻害する要因に対し、将来的にそれを乗り越える創造的な知を創出し、両地区の住民の財産とすることができるのではなかろうか。

また、「記憶地図」の波及効果として、古い町並みを再現した制作途上の「記憶地図」を示しながら聞き取り調査を行う過程で、過去の記憶が生き活きと蘇る「昔時覚醒作用」ともいべき当初予測していなかった効果がみられた。近年、人工知能（AI）で戦前戦後の白黒写真をカラー化することによる「記憶の解凍」と称される効果が注目されている。着色により、戦争を知る世代の記憶を呼び起こしたり、戦争を知らない若い世代に当時を身近に感じさせる力が評価されている（渡邊 2019: 256-259）。「記憶地図」が、それに勝るとも劣らない効果を発揮するのではないかと期待している。「記憶地図」によってアーカイブを行う過程で、地元住民側は普段あまり意識していない行動に目を向け、そこに込められた想いや意味を認識し、「地域振興」や「例祭継承」について考えるきっかけとなり、また調査する側はそれらを住民らと共有し支援することができる。

4-2. 今後の課題

震災前後で大きな例祭の変更を経験した青苗地区では、震災前後で巡行ルートと比較を行った。一方、震災前後で巡行ルートの変更がないと言説があった奥尻地区では、2018年と2019年の比較を実施した。しかし、この2カ年を比較しただけでも、実際には大きな変更があったことが判明した。それ以前にもこうした変化はなかったのか、その理由と共に今後検討を加えていく必要があるだろう。「記憶地図」はいったん作成すれば完成してしまうものではなく、追記や修正を随時加えながら更新し、地元住民の振る舞いの推移を継続的にアーカイブし、地元住民との共有を図ることが重要である。しかし、コロナ禍のために、作成した「記憶地図」の成果を青苗・奥尻両地区の住民らに還元することができていない。近い将来それを実現し、どのようなフィードバックが得られるか注視していきたい。地元住民の例祭など、何気ない振る舞いを、「形式知」に変換する過程を通じ、自らの行動の意味を再認識してもらふ価値は多分にあると考えられる。

謝辞：本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただいた島民の皆様、および青苗言代主神社例祭組織（氏子総代、恵比須山協賛会、青苗みこし保存会）、澳津神社例祭組織（氏子総代、神威山巡行実行委員会）、寿都松前神楽保存会、同保存会・石澤英幸氏、奥尻町教育委員会、北海学園大学人文学部講師・谷端郷氏、学芸員課程の有志ら（有田くるみさん、佐藤圭祐さん、谷遼亮さん、永倉拓輝さん、山田穂乃花さん）に深く謝意を表します。また、匿名の査読者2名からは、論考を深める上で有益なご指摘をいただいたことに心より感謝申し上げます。

本研究は、2020年度科学研究費【基盤研究（A）】「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（課題番号：19H0056501、代表：岸上伸啓）および2020年度科学研究費【基盤研究（C）】「博物館資料の収集と活用を促進させるサイクルの構築」（課題番号：18K0110902、代表：栗原憲一）の研究成果の一部である。

注

- 1 奥尻町は31の行政区で構成されている。本稿では、同一名の行政区をまとめて「地区」と称し、行政区の「青苗1区～8区」を「青苗地区」、行政区の「奥尻1区～5区」を「奥尻地区」とする。
- 2 球浦地区、仏沢地区、谷地・烏頭川地区にはかつて山車が存在したが、少子高齢化や人口減少によって巡行を取りやめており、谷地・烏頭川地区の山車のみが現存している。
- 3 比較する項目の選定にあたっては、これらの文献を参考にした（池内 2006、福田ら 2012、板谷 2015、谷端 2018）。
- 4 奥尻町提供の「行政区別集計表（2019年10月31日作成）」より。
- 5 境界データに関しては、政府統計の総合窓口 e-Stat の「奥尻郡奥尻町（公開・更新日 2018年5月14日）」を用いた。人口データに関しては、4と同じ。
- 6 奥尻町ホームページ「奥尻町人口ビジョン」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00003000/0003007/20160325132055.pdf>（2020年1月17日閲覧）。
- 7 政府統計の総合窓口 e-Stat の社会・人口統計体系より。
- 8 注4と同じ。
- 9 注4と同じ。
- 10 北海道神社庁ホームページ「澳津神社」<https://hokkaidojinjacho.jp/%e6%be%b3%e6%b4%a5%e7%a5%9e%e7%a4%be/>（2020年10月29日閲覧）。
- 11 北海道神社庁ホームページ「青苗言代主神社」<https://hokkaidojinjacho.jp/%e9%9d%92%e8%8b%97%e8%a8%80%e4%bb%a3%e4%b8%bb%e7%a5%9e%e7%a4%be/>（2020年10月29日閲覧）。
- 12 注10と同じ。
- 13 青苗地区の住民は、青苗言代主神社の氏子総代によって行われる、猿田彦を含めた巡行の先導役を「行列」とも呼ぶが、山車行列との混合を避けるため、本稿では「猿田彦」と表記する。
- 14 松前神楽とは、松前藩公式行事で1674（延宝2）年が起源とされている。当時は12の神社の神職によって演じられ藩主により直接庇護されていたが、庶民も豊漁祈願として松前神楽を演じていた（松前町史編集室 1984:906-911）。現在は日本海側各地に伝承されている。四箇散米舞とは松前矩広によって創作された舞で、松前藩の天下泰平を祈願したものである（三嶋神社ホームページ「松前神楽について」mishima-jinja.org/kagura.html（2020年10月16日閲覧））。本来は遷宮式のみ行われる特別おめでたい舞とされる（良き候北加伊道「平成28年度松前神楽北海道連合保存会合同公演 四ヶ散米舞」<https://yokisourou.com/post-1484/>（2020年11月11日閲覧））。

- 15 神威山巡行実行委員会の「誘導係（交通整理）」には、表3の人数に加えて役場から数人の助っ人が派遣される。
- 16 国土地理院ホームページ「自然災害伝承碑」<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>（2020年11月25日閲覧）。
- 17 国土地理院ホームページ「北海道南西沖地震の「自然災害伝承碑」を地図で公開」https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/bousaichiri190711_00003.html（2020年11月25日閲覧）。
- 18 奥尻町教育委員会発行「ふるさと奥尻通信 学芸活動だより第95号」<https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/files/00001700/00001717/20160217164104.pdf>（2020年10月29日閲覧）。
- 19 寿都松前神楽保存会・石澤英幸氏の証言より。

引用文献

池内 泰

2006「神奈川県・江の島における天王祭の成立とその背景—祭礼にみる祭祀空間の考察を通じて—」『人文地理』58(5):433-452.

板谷 直子（牛谷 直子）、中谷 友樹、前田 一馬、谷端 郷、平岡 善浩

2015「「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—」『歴史都市防災論文集』9:73-80.

板谷 直子（牛谷 直子）、谷端 郷、中谷 友樹

2017「「記憶地図」を用いた無形の文化遺産の再生—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—」『歴史都市防災論文集』11:223-230.

今村 文彦

2019「震災・災害アーカイブの今日的意義—新しい防災文化の創成を目指して—」鈴木親彦（編）『デジタルアーカイブ・ベーシックス2 災害記録を未来に活かす』勉誠出版、東京、4-14頁.

宇苗 満

2009『奥尻島の祭神』私家版、奥尻.

宇苗 満

2013『奥尻島』本の泉社、東京.

奥尻町役場

1996『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町役場、奥尻.

奥尻町役場

2003『新奥尻町史 下巻』奥尻町役場、奥尻.

笠羽 晴夫

2010『デジタルアーカイブ 基点・手法・課題』水曜社、東京.

金井 壽宏、楠見 孝

2012『実践知—エキスパートの知性—』有斐閣、東京.

河角 直美、板谷 直子、中谷 友樹、佐藤 弘隆、谷崎 友紀、前田 一馬

2017「記憶地図から読む地域の景観の歴史—仁和寺門前地域を例に—」『ランドスケープ研究』81(1):22-25.

佐々木 理子、蟬塚 咲衣、稲垣 森太、手塚 薫

2019「記憶地図作成による地域情報の可視化—奥尻島谷地地区における事例—」『北海道民族学』15:45-54.

柴山 明寛

2019「震災・災害アーカイブの役割と歴史の変遷と現状」鈴木親彦（編）『デジタルアーカイブ・ベーシックス2 災害記録を未来に活かす』勉誠出版、東京、17-35 頁.

蟬塚 咲衣、佐々木 理子、稲垣 森太、手塚 薫

2019「北海道南西沖地震における奥尻島青苗言代主神社例祭の復興過程をめぐる考察—GIS による祭礼ルートと時間の変化が意味するもの—」『歴史都市防災論文集』13:163-170.

蟬塚 咲衣

2020「2019 年の青苗言代主神社例祭の現状とこれから」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32:34-45.

蟬塚 咲衣、稲垣 森太、手塚 薫

2020「地域課題に直面する奥尻島青苗言代主神社例祭とその対応」『歴史都市防災論文集』14:123-130.

ゼンリン

2016『ゼンリン住宅地図 北海道奥尻町』ゼンリン株式会社、北九州.

高山 正也

2008「日本における文書の保存と管理—現状のアーカイブズと図書館で、未来が拓けるか—」藤原良雄（編）『別冊 環 15 図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店、東京、42-58 頁.

谷端 郷、板谷 直子（牛谷 直子）、中谷 友樹

2018「被災後の町の復興を支える神輿渡御—宮城県南三陸町保呂羽神社の春祭り—」『歴史都市防災論文集』12:193-200.

野中 郁次郎、竹内 弘高

2020『知識創造企業 新装版』東洋経済新報社、東京.

福田 アジオ、内山 大介、小林 光一郎、鈴木 英恵、萩谷 良太、吉村 風

2012『図解案内 日本の民俗』吉川弘文館、東京.

松前町史編集室

1984『松前町史 通説編 第一巻 上』松前町、松前.

三浦 伸也、鈴木 比奈子、堀田 弥生、白田 裕一郎

2019「災害発生後の災害資料の収集・整備・発信とデジタルアーカイブ構築に向けての提案—被災地図書館、国会図書館、研究機関の取り組みをふまえて—」『デジタルアーカイブ学会誌』3(2): 119-122.

矢野 桂司、佐藤 弘隆、河角 直美

2017「市民参加型 GIS による祭礼景観の復原」若林芳樹、今井修、瀬戸寿一、西村雄一郎（編）『参加型 GIS の理論と応用—みんなで作り・使う地理空間情報—』古今書院、東京、118-124 頁.

吉見 俊哉

2017「なぜ、デジタルアーカイブなのか？—知識循環型社会の歴史意識—」『デジタルアーカイブ学会誌』1(1):11-20.

渡邊 英徳

2019「記憶の解凍—資料の“フロー”化とコミュニケーションの創発による記憶の継承—」鈴木親彦（編）『デジタルアーカイブ・ベーシックス2 災害記録を未来に活かす』勉誠出版、東京、241-266頁。

（せみづか・さきえ／北海学園大学、あさづま・ゆうき／北海学園大学、
たはかし・ゆい／北海学園大学、ささき・りこ／横浜国立大学、
いながき・しんた／奥尻町教育委員会、てづか・かおる／北海学園大学）